

『ごん狐』の位置づけについて

— 児童文学作品の古典としての享受 —

水谷隆*

(e-mail : e-mail:midutani@yahoo.co.jp)

<目次>

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1. 日本における『ごん狐』の位置について | 3.1. 物語の十全な享受の難しさ |
| 2. 『ごん狐』のテキストの性質 | 3.2. 古典文学作品としての『ごん狐』の享受 |
| 3. 『ごん狐』の享受のあり方について | 4. 付説 日本文化研究のために |

キーワード：ごん狐 (*gongitsune*)、手拭い (*towel*)、赤い井戸 (*red well*)、教科書教材 (*Textbook teaching materials*)、テキスト分析 (*Text analysis*)、古典文学 (*classical literature*)

1. 日本における『ごん狐』の位置について

新美南吉著『ごん狐』は、鈴木三重吉が主催していた児童文芸誌である「赤い鳥」1932年1月号に掲載された児童文学作品である。「赤い鳥」掲載に際しては、三重吉が相当程度手を加えたと考えられている。その後、1956年に小学校4年生の国語教科書に同作品が初めて載せられて以来、1971年にはこれを採用した国語教科書のシェアが約70%となった。すなわち日本全国の約7割の小学校4年生の子どもたちが『ごん狐¹⁾』を読むことになった。そして、1980年には日本国内で用いられている小学校4年生用国語教科書のすべてに同作品が掲載され、そのまま現在に至っている²⁾。これはすなわち、2017年現在、45歳以下の日本人の大多数がこの作品を授業教材としてじっくりと読み、程度の

* 大阪女子短期大学、准教授、日本古典文学

1) 学習指導要領では、「狐」という漢字は小学校4年生ではまだ教えられていない。そのため、小学校4年生向け教科書教材としては『ごんぎつね』とひらがなで表記される。ただし、本稿では、これを区別せず、すべて『ごん狐』と表記する。

2) 府川源一郎 (2000) 『「ごんぎつね」をめぐる謎』のまとめによる。

差はあれ、それぞれに記憶しているということの意味する。

また、その子どもたちの読みは、ほとんどの場合、教室内で、教師の指導の下に行われていることにも留意したい。そのことによって、子どもたち、ひいては、かつて子どもだった者たちの、この作品内容に対する理解は、教師の意図する方向性に偏りがちとなる。またそのことに加うるに、現実的な問題として、小学校の授業を担当する教員が、みな「国語」を得意としているとは限らない³⁾ 上に、『ごん狐』は、多くの日本人に慣れ親しまれた作品であるため、それぞれの教室での指導内容が保護者や他教員からの批判にさらされる頻度も、相応に高くなっている。そうしたプレッシャーのある状況下で、かなりの割合の教員がいわゆる教師用指導書や、教員向け解説書に記された内容に基づきつつ授業を実践しているものと考えられる⁴⁾。その結果、この作品に対する多くの日本人の思いは、教師用指導書などに示されたものに沿うものとして、比較的均質化している。たとえば、2013年にインターネット上の巨大掲示板である2チャンネルで、「姪っ子のごんぎつねの感想が問題になっているんだが…」という表題のもと、ごんは撃たれて当たり前、という一児童の感想に対して、多くの議論が起こった⁵⁾。しかし、客観的に考えれば、人間生活に害をなす狐が人間に撃ち殺される、というのは別に不自然なことではない。しかし、そうした感想が「問題になる」ということは、その背景として、ごんが撃たれてかわいそう、という画一的とも言える感想が日本に広く普及していることを示している

2. 『ごん狐』のテキストの性質

上にも記したように、『ごん狐』は広く親しまれ、そのためこの作品に関心を寄せる者も多く、さまざまな観点から議論の俎上に載せられることにもなっている。そして教育者だけではなく、文学研究者も加わって、テキストの精密な読解を試みた例もまた多い⁶⁾。

しかし、そもそも『ごん狐』は、精密で論理的な分析・読解を施すことがふさわしい種類

3) 現行の教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則では、小学校教諭免許取得のために「国語」の単位は必須とされていない。

4) 現在、インターネット上に見られる同作品の教育実践報告や、指導案の例の多さも、その状況を反映したものと判断される。

5) <http://hayabusa.2ch.net/test/read.cgi/news4vip/1367997086/> (2017.05.19)

6) たとえば、2017年2月時点で、国文学研究資料館の「国文学論文目録データベース」では、『ごん狐』を対象に取り上げた論文が114本確認できる。

の作品なのだろうか。

上の問いの意味を明らかにするために、次の例を示したい。

『ごん狐』には、兵十の住んでいる家にある「物置」が4回と、「納屋」が1回現れる。一方、新美南吉のノートに残された、『ごん狐』の草稿と目される『権狐』では、それぞれに対応する5箇所全てが「納屋」と記されている。これについては、沢田保彦氏の、新美南吉の原稿に「納屋」とあったものを、鈴木三重吉が、子どもたちへの配慮として「物置」と書き換えた際に、一カ所直し忘れた結果、『ごん狐』中に「物置」と「納屋」とが混在したものとする推測がある⁷⁾。これは至極妥当なものと思われる。また、「お母と二人きりで貧しい暮らし」をしていた兵十の家に、「納屋」と「物置」の両方があるのは、当時の暮らし方としてそぐわない、という同氏の指摘も、もっとも感じられる。この点だけでも、現行の『ごん狐』は、瑕疵のあるテキストであることが明らかであり、これを精密・論理的に読み深めるといふ営為に、どのような意味があるのか、無反省ではいられないだろう。ここに本稿の問題意識の端緒がある⁸⁾。

また一方で、この三重吉のミスに気づき、貧しい暮らしをしているはずの兵十の家に納屋と物置の両方があるのはおかしい、と、違和感を覚える読者がどれほどいるのか、ということも考えておきたい。実際、現在の読者である子どもたちのほとんどは「納屋」のありようを実感的にイメージすることができないのであるから、これを変だと感じることはありにくいはずである⁹⁾。またそもそも、そうした違和感があまりなかったからこそ、三重吉もうっかりとそのようなミスを犯したという可能性もある。

つまり、「納屋」の問題は、精密に分析すればおかしいと指摘できるものではあるが、それは作品全体の読みにはほぼ影響を与えないのである。ならば、こうした分析は、読者にとってどれほどの意味を持つのだろうか¹⁰⁾。

別の例をあげる。兵十が川でうなぎを取っていた、その理由について、

○キツネのごんは、兵十が病気の母親のために取った魚をいたずらして逃がしてしまう。そ

7) 沢田保彦 (1994) 「新美南吉の生い立ちと『ごんぎつね』の成立」 (『新美南吉「ごんぎつね」の教材研究と全授業記録・実践国語研究別冊』)

8) むろん、このような点があることをもってこの作品の価値が低いというつもりは毛頭ない。また、だからといって、論理的に整合性のあるテキストになるよう、この作品を改変すればよいということにもならないだろう。

9) 現在、この作品を扱った授業の実践報告を様々なかたちで見ることができるが、このことに子どもたちが気づいた、とするものは、私には見つけられない。

10) これはあくまで、一般読者に供するものとしての意味を問うものであり、基礎的な研究としてこうした調査・分析が大切なものであることは言を俟たない。

の後、母親が亡くなったと知ったごんは、償いのために兵十の家にクリやマツタケを届ける。それを知らない兵十はごんを火縄銃で撃つが、届け物をしていたのがごんだったと気づく。小学生向けの国語教科書で長く採用されている定番の物語としても知られる¹¹⁾。

○ある日ごんは兵十が川で魚を捕っているのを見つけ、兵十が捕った魚やウナギを逃すという悪戯をしてしまう。それから十日ほど後、兵十の母親の葬列を見たごんは、あのとき逃がしたウナギは兵十が病気の母親のために用意していたものと悟り、後悔する¹²⁾。

などのように、兵十は病床の母親に食べさせるためにうなぎを捕っていたのだ、とする言説がしばしば見られる¹³⁾。しかし、これに関して作品中では、次のような記述がなされるのみである¹⁴⁾。

[うなぎを捕獲する兵十を描く場面]

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやつてゐます。ごんは、見つからないやうに、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな。」と、ごんは思ひました。兵十はぼろ／＼の黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶつてゐました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついてゐました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんしろの、袋のやうになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちや／＼はいつてゐましたが、でもところ／＼、白いものがきらきら光つてゐます。それは、ふといの腹や、大きな腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして又、袋の口をしばつて、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上りびくを土手においとして、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

11) 2011年1月24日付朝日新聞夕刊 社会
(コトバンク<https://kotobank.jp/word/童話ごんぎつね-889846> (2017.05.19)) より。下線は引用者による、以下同じ。

12) ウィキペディア<https://ja.wikipedia.org/wiki/ごん狐> より。

13) 私の勤務校で学生たちに尋ねてみても、同様の記憶を持っているものがかなりの割合で確認できる。

14) 以下、『ごん狐』の本文は「赤い鳥」所収のものを用いる。なお、現在、各社の小学校国語教科書に掲載されている本文は、これをもとにした『校訂新美南吉全集』の本文の漢字や仮名遣いの表記を改めたものである。

[ごんの考えを描く場面]

その晩、ごんは、穴の中で考へました。

「兵十のお母は、床についてゐて、うなぎが食べたいと言つたにちがひない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたづらをして、うなぎをとつて来てしまつた。だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることが出来なかつた。そのまゝお母は、死んぢやつたにちがひない。あゝ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもひながら、死んだんだらう。ちよッ、あんないたづらをしなけりやよかつた。」

このように『ごん狐』の本文には、兵十が病床の母のためにうなぎを捕っていたというのが本当の事かどうかは示されておらず、そのことからすれば、これは、ごんが一方的に思い込んだことにすぎないという可能性も多分にある。多くの論者もそのことを、

○おっかあの死と、うなぎとを結びつけたごんの推察の正当性が、明確に本文中に示されているわけではない。作品の語り手も、そのことについては、口をつぐんでいる。それはあくまでもごんの想像でしかない。それが事実だったかどうかは、結局のところ不明なのだ¹⁵⁾。

○ごんは、心の中で兵十と母親の別れを邪魔してしまったと思い込み、悔やんだのです¹⁶⁾。

○そこではごんのどんな心の動きがあるかという、〈兵十のおっかあは、とこについて……うなぎが食べたいと思ひながら死んだんだらう〉と、見てないことを推量して言っています¹⁷⁾。

と指摘する。つまり、兵十が病床の母のためにうなぎを取っていたとする言説は、論理的に不正確と言わざるを得ない。

しかし、先ほど述べたように、兵十は母のためにうなぎを取っていたのだと読者に記憶されるケースが少なからず確認できるのである。それは、多くの教育実践報告が伝えるように、この作品を読む者の多くは、ごんの気持ちに寄り添って作品世界に没頭する。そのような心情でごんの独白「兵十のお母は…うなぎが食べたいとおもひながら、死んだんだらう」を受

15) 府川 (2000)

16) 立石泰之 (2015) 『たしかな教材研究で読み手を育てる「ごんぎつね」の授業』

17) 寺村記久子 (2015) 西郷竹彦監修文芸教育研究協議会編集『新版小学校四学年国語の授業 光村版』

け取るとき、ごんの「想像」を、そのまま自分の思いとして受け取ることになるためだと考えられよう。そして、それがその形のままで記憶される場合があるということなのである。ならば、この不正確な作品の読み取り方を、単なる理解不足として排除するのではなく、そうした不正確な読みを積極的に誘導するテキストとして『ごん狐』を見ること、つまり、「兵十は病床の母親に食べさせるためにうなぎを捕っていた」という読みもこの作品の享受のひとつの「正しい」ありかたとして認めることが、この作品の性格を正当に把握するために有効な方法なのではないか。

さらに例を示す。これも多くの論者が問題として取り上げるところであるが、作品中で「六」とされた、結末の場面、

そのあくる日もごんは、栗をもつて、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄をなつてゐました。それでごんは家の裏口から、こつそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいつたではありませんか。こなひだうなぎをぬすみやがつたあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「よし。」

兵十は、立ちあがつて、納屋にかけてある火縄銃をとつて、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよつて、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたはれました。兵十はかけよつて来ました。家の中を見ると土間に栗が、かためおいてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びつくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなづきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出てゐました。

で、ごんの気持ち兵十に通じたのかどうか、という問題がある。この場面に至るまでのごんの気持ちとは、「おれと同じ一人ぼつちの兵十か。」というごんのつぶやきからして、「うなぎのつぐなひ」だけではなく、兵十と仲間あるいは友になりたい、という類の願望を含むものであると読み取ることができる。しかし、そのごんの思いを——ごんと兵十の、作品中に描かれた交渉過程だけに基づいて論理的な説明をつけたならば——兵十は知り得ないということになる。それは、

もちろん、ごんが栗や松茸を持ってきてくれたということは理解されたであろう。また、お母の死後、その行為が毎日続いているということを思い起こせば、うなぎ事件の〈つぐない〉として持ってきたのかもしれないというところまでは理解されたかもしれない。

しかし、同じひとりぼっちになったことに共感して、仲間を求めようとしたこと（求愛行為）まではわからないだろう。「ごんの思いのすべては理解しようがない」のである¹⁸⁾。

などと、従来から説かれる通りである。ところが、現実の読者の多くはそのような理解をしない。

○多くの実践報告を見ていくと、ごんの思いが兵十に届いたものの、その時はすでに遅かった、と解釈している教室が圧倒的に多い¹⁹⁾

○多くの教室で、「伝わった」と解釈され、実践されていることがわかる。「解釈の偏り」は、児童だけでなく、教師もそうなかもしれない²⁰⁾。

などの報告が示すとおり、兵十はごんの気持ちを理解し、気持ちは伝わった、と受け取ることが多いのである。では、なぜそのような現象が起こるのであろうか。

たしかに、栗や松茸を兵十の家に運ぶごんの気持ちの底には、「求愛」ともいえる要素が含まれていると、テキストを慎重に読めば理解できる。ただ、ごん自身がはっきりと意識しているのは、「おれが、栗や松たけを持つていつてやるのに、そのおれにはお礼をいはないで、神さまにお礼をいうんじやアおれは、引き合わないなあ。」ということである。すなわち、「求愛」の念はさほど自覚されず、また「つぐなひ」の気持ちもいつの間にか忘れられて、栗を持ってきているのは自分だということを知ってもらいたい、自分のことを認知してもらいたいという願望に、ごんの気持ちは収斂しているのである。ならば、最後の場面で「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」と、兵十に認知されたことで、ごんにしてみれば、自分の思いがかなえられたと感じた、ということになるだろう。前述したように、この作品

18) 鶴田清司 (2005) 『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』第2章。なお、「ごんの思いのすべては理解しようがない」というのは、府川 (2000) の「だが、あえていうなら、兵十はごんの思いの何ほどを理解できたであろうか。ごんの内面によりそって物語を読んできた読み手は、ごんの反省や、兵十に対するひたむきな接近行動に潜む感情を十分に知っている。が、ごんのむくろを抱いた兵十にごんの心中は伝わるはずはない。兵十には、自らの孤独感を基盤として兵十と連帯しようとしたごんの思いのすべては、理解しようがないのである。」による。

19) 府川 (2000)

20) 佐々原正樹 (2014) 「「解釈の偏り」を前提にした授業実践の構想—「ごんぎつね」を事例として—」(国語科教育75巻)

の読者の多くは、ごんの気持ちに寄り添って作品世界に没頭する。したがって、ごんの最期の顔も、そうした読者からは、気持ちが通じたことに対する満足の表現と受け取られることになる²¹⁾。また、撃ち倒されたごんのそばに駆け寄ってきた兵十が「火縄銃をばたりと、とり落しました」とあるのも、単に栗や松茸を「毎日毎日くれ」ていたのがごんだということに気づいた、という驚きだけによるものとしては、いささか大げさに過ぎよう。そうではなく、自分に対して好意を持っていたごんを撃ってしまった、という、取り返しの付かないことへの後悔の念のためのものと受け取る方が、心情的には納得がいく類の反応ではないだろうか。『ごん狐』は、やはり、そうした読みを要求する作品だと考える方が妥当であろう²²⁾。

なお、このような受け取り方をするとき、論理的なつじつまをあえて合わせるためには、兵十は、論理を越えた、神の啓示か何かでもってごんの気持ちを理解したとでも言わなければならないことになる。そして、そのつじつま合わせはご都合主義的な恣意的解釈に過ぎないとする立場に立つとき、「ごんの思いのすべては理解しようがない」という結論にいたる。けれども、一匹の「小狐」であるごんに人間のような思考をさせている時点で、この作品は、一般常識的な論理を越えたファンタジーなのであり、兵十がごんの真意を全て理解した——常識的な世界ではあり得ないことだが——としても、それは、この作品内では十分にあり得ることなのである。

以上、『ごん狐』というテキストは、精密で論理的な分析を追求するのがふさわしいとは

21) たとえば泉明正 (1976) の実践報告 (「季刊文芸教育」第17号) には、子どもたちのほとんどがごんの気持ちが通じたという受け取り方をしたことに対して「兵十の身になって、兵十の視点に立って語らせようとしてもだめでした。視点の転換があっても、今までごんの身になり、ごんとつき合い、よろこびも悲しみもしてきた子ども達は、読者としてせりあがっていきます。」と、ある。こうした享受が通常の反応と考えられよう。

22) そのような一般読者の読みを、精密な論理でもって修正するような営みも現在の教室で実施されているようである (たとえば佐々原 (2014))。こうした営みには、無論、読解のトレーニングとしての有用性は十分に認められる。しかし、けれども、そうした論理的な読解をすることは、ごんが命と引き替えにようやく兵十に思いをわかってもらえた、という感動を薄めてしまう可能性が高いのではないか。精密で論理的な読みは、時として論理構築の面白さの方に読者の関心を向けさせ、作品そのものから受ける感動や印象をなおざりにさせてしまう場合が往々にしてあることは、文学を研究する者の多くが経験済みのことと思う。一方、『ごん狐』の「正しい」「主題」を探求する過程で、ごんの気持ちは兵十には通じなかったという考えが導き出されることについて、「「ただ一つの実体としての「正しい」主題を求心的に追求していくと、教室のなかの子どもたちの〈読み〉は息苦しくなってしまうがちだ。…1970年代以降になってから…ますます「自己の実感」から離れた「主題読み」が蔓延したのである。」

(府川 (2000)) のように、文学作品を教育の場に於いて論理的に、厳密に読むことへの再考を促すような考え方も既に見られるところのものである。ただ、本稿は、こうした問題を教育の一般的態度として論ずることを目的にするのではなく、作品により「正しい」読みの探求がふさわしいものと、「実感」に基づく読みがふさわしいものがあることを主張したい。

思われない要素を持つものであること。また、精密で論理的な分析の結果得られるものと、直感的な読みによって受け取られるものとの間にずれを生じさせる性質のものであることを述べた。

3. 『ごん狐』 享受のあり方について

3. 1. 物語の十全な享受の難しさ

次に、『ごん狐』のテキストが有する別の問題として、現代人、とりわけこの作品が主として想定する読者である子どもたちにとって、わかりにくい、あるいは、わかりえない箇所がいくつかわか存することを確認しておきたい。

たとえば、次のような場面である。

ごんがはりきり網で漁をする兵十の姿を見てから十日ほどして、「弥助の家内が、おはぐろをつけてゐました。鍛冶屋の新兵衛の家のうらをとほると、新兵衛の家内が、髪をすいてゐる」た。それを見たごんは、「ふゝん、村に何かあるんだな。」と思い、さらに村の様子をうかがう。観察の結果、「ああ、葬式だ。」とごんが判断した根拠は、「こわれかけた家の中には、大勢の人があつまつてゐました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいてゐます。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えてゐました。」と描写された光景であった。中でも判断の決め手になるのは、「よそいきの着物を着て」いるにもかかわらず「腰に手拭いをさげたり」して炊事をする女たちの姿であろう。こうした、一般の家庭で執り行われる葬儀での会食を、近所総出で用意する女性たちの、一種のよそ行き服である喪服を着て炊事場で立ち働く姿は、かつての日本ではあたりまえのように見られた光景なのであるから。

しかし、葬儀場での葬儀が一般化した現在の日本で暮らす子どもたちがこの描写を読んで、ああ葬式だ、とただちに判断できるとは考えにくい。つまり、現代日本で暮らす普通の子どもたちには、「よそいきの着物」に「手拭い」を下げ、かまどで火をたく女たちをみて、「ああ」と合点した、ごんの心の動きに寄り添うことは困難だと言わざるを得ない。

また、次の場面はどうだろうか。

母の葬儀も終わり、日常の生活に戻った兵十が「赤い井戸のところで、麦をといでゐました。」という描写がある。この「赤い井戸」は、『校訂新美南吉全集』第3巻²³⁾の注

23) 大日本図書 1980年

に、「茶褐色の土管を用いた簡素な井戸…この土管は知多郡常滑産で、うわぐすりをつかわず素焼きに近い。経済力に応じ、黒や茶のうわぐすりをかけた光沢のある土管、二度焼きした土管をも使用。」と記されていることに基づくと思われるが、貧しい兵十の暮らしを示すものとして描かれたものであると説明されることが多い²⁴⁾。たしかに、『ごん狐』のテキストが意味するところはその通りだろう。しかし、こうしたことは、現代の読者の大部分には、説明なしでの理解は不能である。

なお付言すれば、常滑で、すなわち日本で土管製造が本格化したのは明治6年(1873年)。井戸に用いることができるような大型のものが製造可能になったのは明治16年(1883年)のことである²⁵⁾。従って、『ごん狐』に描かれた「赤い井戸」という風景は、それ以後のものということになる。ところが、この作品の時代設定は冒頭に「中山といふところに小さなお城があって、中山さまといふおとのさまが、をられた」とあることから、江戸時代と想定され、そこに時代考証的な矛盾が生じている。このことも、前章で述べた、『ごん狐』を論理的、精密に分析することの難しさを示している。

また、「赤い井戸」に続く「麦をといでみました」の「麦」も、兵十の豊かとは言えない生活を象徴的に描くものと、一定の年齢以上の者には容易にわかるだろうが、現代日本の子どもたちが、それを説明なしに読み取ることは難しいはずである。もちろん、それらに関する知識を有しなければ、作品を受け取ることができないということではない。たとえば、前に挙げた「手拭い」の場合は、ごん自身の口を借りて「葬式だ。」と伝えられるし、「赤い井戸」についても、別にそれが貧しさの描写であることを知らずとも、その直後に「兵十は今まで、お母と二人きりで貧しいくらしをしてゐた」と記されている。従って、「よそ行きの着物に手拭い」や、「赤い井戸」、「麦」の示唆するところを知らなくても、作品の読み取り自体は可能である。ただ、そのイメージや込められたニュアンスを、実感をもって理解するのが困難になるということである。

上にあげたような、作品が作られた時代の社会と、現代の読者たちが生きている社会との差異に起因する、テキスト読解上の困難は、他にも作品中の各所に指摘することができる²⁶⁾。そのことは、『ごん狐』が書かれてから既に80年以上の時間が過ぎていることから

24) 「新美南吉を語る—ごん狐のふる里」 劇団前進座青少年劇場発行(1981)に「こげ茶色の土管の井戸というのは、一番安い土管なんです。ということは、その井戸を使っている兵十という家の経済的なレベルを示している訳です。だから、兵十は貧乏だったとかひと言もかいてませんけれども、赤い井戸を使っているという事で、兵十の生活レベルというものがわかる。」との記述がある。その後、諸氏によってこうした考えが引き継がれているようである。

25) 常滑町史編纂会『鯉江方寿翁』(1921)

すれば、むしろ当たり前のことであり、その解釈の困難性を前提として、この作品をどのように子どもたちに与えるべきかを考えることが重要だと考える。

3. 2. 古典文学作品としての『ごん狐』の享受

上に述べたことの確認になるが、『ごん狐』を、大多数の読者である子どもたちに与える場、すなわち教室において、作品をより深く理解するための手助けとなる知識や情報を教授することは、この作品を子どもたちに与えようとする限り、必須の条件とも言えよう。では、そのような手間をかけてまでこの作品を子どもたちに与えることにはどのような意味があるのか。このことについて、本稿では、これらの、時代や地域の差に基づくものに関する知識が、『ごん狐』というテキストの理解のために有益なだけでなく、読者自身の暮らす時代や社会の文化を相対化して見るためにも効果的な材料となるということに注目したい。

たとえば、上に述べた「手拭い」の箇所であれば、よく言われる、現代日本社会の地域コミュニティにおける人間関係の希薄化について再確認するきっかけとなりうるだろう。またたとえば、「赤い井戸」の問題はどうだろうか。「赤い井戸」が貧しい暮らしをイメージさせる、という情報は、一義的には、兵十の暮らしぶりについて考える材料として用いられることになる。しかし、井戸を用いた暮らしの経験がほぼないであろう、現代の多くの子どもたちにとって、こうした情報は、たとえば、生活用水を潤沢に使う現代生活のありようについて省察するための材料としても活用しうるものである。

私見では、こうした、読者自身の属する社会や自分の生き方について再考し、自らの知らなかった考えやあり方を得ることが、古典文学作品を読む、あるいは与えることの、重要な意味の一つと考える。なお、ここでいう古典文学とは、「万人、少なくとも当該集団の大多数にとって価値があり、しかもそれが時代を越えて永続するとされる書物群というカテゴリーを設定し、それを教育その他の手段を通じて普及させ、そのことによって文化を涵養して

26) たとえば、「墓地には、ひがん花が、赤い布のやうにさきつゞいてみました。」とあるが、墓地に咲く彼岸花の光景は、かつてほど見られなくなっていると思われる。そうした光景を子どもたちが実感を持ってイメージすることは難しいし、なぜ墓地に多く植えられているのか、という事に関する知識もほとんどの子どもたちにはないだろう。またたとえば、兵十がうなぎと一緒に捕っていた「きす」についても、それがどんな意味を持つのか、食べるものなのかどうか、漁の対象として好まれたものなのかどうか等、「岩滑では、ハヤ(鮠)のことをキスと呼んでいました。ハヤとは、アブラハヤ、ウグイ、オイカワ、カワムツなど、コイ科の淡水魚のうち中型で細長い形をしたものの呼び方で、ハエとも言います。(半田市教育委員会(2009)「ごんぎつねものしり図鑑」<http://www.handa-c.ed.jp/nankichi/>)という知識がないだろう、一般の日本人にとっては理解できない。こうした、時代や地域の差異に基づく解釈の困難性がいくつも指摘できる。

いくべきだという思想」²⁷⁾に支えられ、支持されたテキストと考える。『ごん狐』は、現代の日本において、多くの人から価値があり、今後も教育によって受け継ぐべきだと考えられていることは、長年にわたっての、小学校国語教科書への採択率100パーセントという数字が示している。ならば、この作品を通じて、今後、どのような日本の文化を涵養しようとするのか、今まで以上に自覚すべきだと、私は思う。

『ごん狐』は、作られてから既に一世紀近い時間を経たものである。そこから来る必然として、描かれた生活や社会のありようは、現代のそれとは、おおいに異なるところを含んでいる。それを理解の困難性をもたらすものとして捉えるならば、『ごん狐』は、子どもたちに与える作品としては、役割を終えたと考えることもできる。しかし、この作品は、多くの日本人に愛され、守るべきものとされ、子どもたちに与えられている。そのことをはっきりと自覚し、この作品を古典として享受していくという意識を持つてはどうか。すなわち、『ごん狐』を、現在の教育実践でしばしば見られるような、読解のトレーニング²⁸⁾のための素材として扱うのではなく、一つの共有すべき文化遺産として扱うこと。具体的に言えば、精密な読みを求める——そもそもこの作品は精密な読解をするにはふさわしくない性質を持っていることは、本稿で述べたところである——のではなく、読者一人一人の率直な読後感を記憶に刻ませ、人生の折々の場面でふり返ることができようようにすることを目的とした教育がなされてもよいのではないだろうか。また、このことを敷衍して考えるならば、『ごん狐』は、現在小学校4年生の国語教材として扱われるが、これを幼児期から始め、様々な世代で繰り返し読めるような機会を、より積極的に作ることも、現実の可能性はさておき、意味のあることと言えるだろう。

4. 付説 日本文化研究のために

前述のように、現在の日本ではかなりの数の大人たちが、ごんと兵十の「気持ちの通じ合い」を成し遂げた物語として『ごん狐』という作品を記憶している。それは、テキストがそのように読める、受け取られる、ということが最たる理由だと本稿では考えてきた。ただ、そのことと合わせて、日本人の多くがそのように教えられてきた、ということも無視することはできないだろう。これも既に述べたとおり、小学校教員のかかなりの割合が国語を専門とはしない

27) 塩川徹也 (2016) 「古典とクラシック—ことばとことがら」 (『古典について冷静に考えてみました』)

28) たとえば、しばしば見られる兵十の家の見取り図を書かせるような指導など。

め、実際の授業に際しては、各教科書会社が出版している教師用指導書によりつつ授業計画を立案することが多いと想像される。そうした状況下で、教師用指導書の記述内容は授業に大きな影響を与え、ひいては子どもたちの作品理解の方向性を左右することにもなる。今、教師用指導書の内容を近藤氏らのまとめ²⁹⁾を借りて示せば、

- (1) 光村図書：「死をもってしか通じ合えなかった心の交流の悲しさ」
- (2) 学校図書：「ごんも兵十も貧しく孤独な境遇にあり、共感し合える間柄なのに、殺し・殺されるという形でしか心が通じ合わなかった痛ましさ」
- (3) 教育出版：「償いを通して兵十に心の交流を求めたごんのひたむきさと、死を通してしか理解し合えなかった悲しさ」

という状況である³⁰⁾。これら、各出版社の教師用指導書が、前に紹介したような研究者たちの意見、すなわち、本当にはわかり合えていなかった、という読みを知らないで記述されたということは考えがたい。本当にはわかり合えていなかったという読みのあることを知った上で、しかし、「通じ合えた」と解説しているとは見なくてはならないだろう。では、なぜそのようなことをしているのか。以下は推測に過ぎないが、次のふたつの要素が想定される。

ひとつには、文部科学省が、国語では、「道徳」の内容を適切に指導せよと指示していることである。今、現行の小学校4年生の指導要領から該当する部分を示せば、

- (7) 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第3に示す内容について、国語科の特質に応じて適切な指導をすること。(第2章 第1節 国語 第3 指導計画の作成と内容の取扱い より)
- (3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(第3章 道徳 第2 主として他の人とのかかわりに関すること より)

とある。授業で扱う作品の読みそのものとは別に、友達とは理解し、信頼し合うべきだという徳目が、小学校の教室で意識されているだろうことがここからも推測される。この意識が、教師用指導書にも反映している可能性があるだろう。

29) 近藤政美・遠藤雅子・濱千代いずみ(2004)「国語教育における新美南吉「ごんぎつね」の主題に関する考察」(岐阜聖徳学園大学国語国文学23号)

30) これ以外にも、近年利用頻度が高まっていると推測される、インターネット上の教師用アイデアを記すサイト「エデュペディア」「toss」等でも、同様の傾向が見て取れる。

もうひとつには、指導要領の指示と無関係ではないと思われるが、現在の日本社会、あるいは日本文化が「心の通じ合い」に高い価値を考えているということがあるように思われる。そうした価値観を子どもたちに教えようとする意識が、教師用指導書の作成者にもあるのではないだろうか。

このようにして作られた、教師用指導書の内容に基づいた教育を受ける時、『ごん狐』を教室で学ぶ子どもたちのほとんどが、この作品を「気持ちの通じ合い」を描いたものと、疑うことなく記憶することになるだろう。

同様の例をもうひとつ挙げておきたい。「兵十が病床の母親にうなぎを食べさせたいと思っていた」という、相当数の日本人が抱いている理解は、既に述べたとおり、テキスト上からは読み取れない、いわば不正確なものであった。さらに言えば、兵十は、

…兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして又、袋の口をしばつて、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上りびくを土手においといて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。

のとおり、うなぎをごみと一緒にびくにぶち込み、そして、そのうなぎの入ったびくを土手に置いたままだこかへ行っている。もしも兵十が、病気の母親にうなぎを食べさせたいと切に願っていたのであれば、こうした行動は、その心情にふさわしくないと、一般的には受け取られるだろう。そうした思いでうなぎを手に入れたのであれば、ただちに母の所へ持って帰るのが、似つかわしい行動だろうから。このように、現代日本において常識的と思われる判断に基づけば、少なくともうなぎを捕獲した時点では兵十は切実に母にうなぎを食べさせたいとは思っていなかったとさえ読み取りうるのである。それにもかかわらず、かなりの数の読者が、兵十が病床の母にうなぎを食べさせようとしていた、と受け取っている。これは、兵十を孝行息子として捉えたい。母親のことを思いやるのが、母一人子一人の家庭においては当然のことだ、という倫理的規範、あるいは願望を、日本人の多くが持っているということの表れと考えられるのではないか。

おそらくは、このような考え・倫理観とともに、この『ごん狐』は子どもたちに与えられてきた。そして、その子どもたちの多くは成長して既に日本社会の中核を担っている。ならば、日本人たちの多くがこの作品を支持しているということは、そのまま、今説明したような倫理観を、相当数の日本人が肯定的に見ているということになるのではないか³¹⁾。かくして、教室

における『ごん狐』の教授が日本人の価値観、倫理観のひとつを再生産しているのである。ならば、『ごん狐』がどのように受け取られる作品なのか、そしてどのように受け取られているのかを研究することは、日本人の価値観や倫理観という、文化の一側面を実証的に明らかにしていく、という意味をも有するといえるだろう。

最後に、日本人である私が、日本ではない場所に、この作品を対象とする拙稿を問うのは、今述べたような、日本文化のありようの解明に資する研究を、日本を相対化しつつ行うことを望むからであり、また、日本文化をバックボーンとしない研究者からのご批正を乞うことで、相互理解の片端なりとも担うことを願っての作業でもあることを申し述べておきたい。

【参考文献】

- 劇団前進座青少年劇場「新美南吉を語る—ごん狐のふる郷」（未見 北吉郎「「ごんぎつね」の文学の授業（六年）（一）—授業の概要—」 高知大学学術研究報告 人文科学編38号 1989年から引用した）
- 佐々原正樹（2014）「「解釈の偏り」を前提にした授業実践の構想—「ごんぎつね」を事例として—」 国語科教育75巻 全国大学国語教育学会 p.59
- 沢田保彦（1994）「新美南吉と「ごんぎつね」の世界」 実践国語研究別冊 1994年版 明治図書 p.76
- 塩川徹也（2016）「古典とクラシック—ことばとことから」 『古典について、冷静に考えてみました』 岩波書店 p.24
- 立石泰之（2015）『たしかな教材研究で読み手を育てる「ごんぎつね」の授業』 明治図書出版 p.24
- 鶴田清司（2005）『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』 明拓出版 p.89
- 寺村記久子（2015）『教科書指導ハンドブック新版小学校四学年国語の授業光村版』 新読書社 p.126
- 常滑町史編纂会（1921）『鯉江方寿翁』 常滑町史編纂会 p.39
- 府川源一郎（2000）『「ごんぎつね」をめぐる謎』 教育出版, p.109, p.160, p.164, p.123, p.124, はじめに iii

論文投稿日：2017. 04. 17.

論文審査日：2017. 05. 10.

掲載確定日：2017. 05. 10.

31) 「「ごんぎつね」のようにすべての教科書に掲載されている作品が、学習者に与える影響は、きわめて大きい。というのは、義務教育を受けようとする限り、どの子どもも必ずこの教材をくぐることになるからである。大げさないうなら、日本人としてのアイデンティティの形成に関わる問題でもある。」（府川（2000）という説明の通りである。

< 要旨 >

『ごん狐』の位置づけについて
— 児童文学作品の古典としての享受 —

水谷隆

新美南吉著『ごん狐』は、現在小学校 4 年生用のすべての国語教科書に掲載され、多くの日本人に慣れ親しまれた児童文学作品である。それゆえに、そのテキストの精密な分析が多くの研究者によってなされてもいる。しかし、この作品には、精密で論理的な分析を追求するのがふさわしいとは思われない要素が含まれ、それとともに、精密な分析の結果得られるものと、直感的な読みによって受け取られるものとの間にずれを生じさせる性質がある。また、『ごん狐』が作られてから一世紀近くの時間が過ぎた現在、想定される読者である子どもたちにとっては、解説なしに理解することが難しい部分もある。そうした作品を、従来のように、読解のトレーニングのための教材として子どもたちに与えるのではなく、古典文学作品として位置づけ直し、文化について省察するきっかけとして考え直してはどうだろうか。

On the Positioning of *Gon Gitsune* as a Classical Juvenile Literary Work

Mizutani, I Takashi

Gon Gitsune, written by Nankichi Niimi, is now adapted in all of the fourth-grade Japanese textbooks. Its story is very familiar to most of us and close analyses of the text are done by lots of scholars. However, the story contains several elements that are not appropriate to close and logical analyses. At the same time it has a tendency to cause a gap between what we get by close analyses and what we understand through instinctive readings. Now that almost a century has passed since *Gon Gitsune* was published, some parts of the text are difficult to understand without explanations for the children that are supposed to be its readers. Such a work we may not give children as a teaching material to train the reading comprehension as ever, but we may reposition it as a classic juvenile literature. And furthermore I'd like to propose that we should reconsider it as an opportunity to examine our traditional culture.